特集

地域を元気に

大学生ら若者の挑戦

若者の可能性は無限大です。夢の実現に向け、積極果敢に挑戦している姿は頼もしく、地域を元気にしてくれます。今回の特集では、神埼市の特産品「和菱」の再興プロジェクトに取り組んでいる西九州大学の学生グループ「菱を救い隊」と、佐賀大学発のベンチャー企業で運動部活動と外部指導者を結ぶウェブサービスを展開している「ＷＩＤＥ」（鹿島市、北原誠大代表取締役）を紹介します。

西九州大学「菱を救い隊」

神埼市の特産品「和菱」再興を

きっかけは商品開発の授業

「やっていて、とても楽しい。僕たちは『やれるんだ』って実感しています」―。西九州大学健康栄養学科４年の樺嶋颯明（そうあ）さん（22）、仲田昂右（こうすけ）さん（22）、池田圭佑（けいすけ）さん（21）は、とびきりの笑顔でこう話します。３人は絶滅の危機にある神埼市の特産品「和菱」を救いたいと一念発起。大学や友人、神埼市、地域の商店主や農家など周りの支援を受けながら、和菱の生産や商品開発を目指しています。

西九州大学の学生グループ「菱を救い隊」のメンバー。（左から）池田圭佑さん、樺嶋颯明さん、仲田昂右さん

樺嶋さんら「菱を救い隊」の３人が和菱と本格的に向き合い始めたのは、１年ほど前のことです。３年生になり、和菱研究の第一人者として知られる安田みどり教授の授業で、その商品開発にチャレンジすることになりました。和菱の外皮には、健康によいポリフェノールが豊富に含まれており、それを何に使えばいいのか、３人は知恵を絞り始めました。具体的な商品化のために動くようになって、どんどん楽しくなる一方、和菱の生育環境が危機的な状況にあることも実感するようになりました。

和菱の外皮にはポリフェノールが豊富に含まれている

クリークの和菱、異常気象などでゼロに

和菱について研究する３人

年配の方には、「記憶の風景」として脳裏に刻まれていることでしょう。旧神埼町や旧千代田町の平野部には、網の目のようにクリークが走り、かつては夏場になると、いたるところで和菱が青々と繁茂していました。「ハンギー」と呼ばれる木製のたらいに乗って和菱を収穫する姿は、まちのあちこちで見られました。栗に似たホクホクとした食感を気に入っていたという方も多いことと思います。

ただ近年、そうした風景は消えてしまっています。神埼市内で２０１８年度に約１・７トンあった和菱の生産量は、異常気象やカメの食害などの影響を受け、クリークからの分がほぼゼロに。水田での栽培についても、農家の高齢化などによる担い手不足で急減しています。関係者の間には、このままでは古くから愛されてきた地域特産の和菱が完全になくなってしまうという強い危機感があります。

昔ながらの「ハンギー」で菱の収穫を体験する３人

忍者姿でポーズを決める３人

最初に手掛けた「ひしぎょうざ」が人気に

樺嶋さんら３人は、こうした状況を知り、和菱の再興に向けた栽培と商品開発を同時に進めたいと動き始めました。最初に手掛けたのは「ひしぎょうざ」です。佐賀市呉服元町の中央マーケットの中にある人気店「ぎょうざ屋」を営み、「加藤餃子研究所」で新商品開発に力を注いでいる加藤均さんに協力をお願いしました。試行錯誤の上、商品が完成。３月に佐賀城下ひなまつりの関連イベントとして佐嘉神社で開かれた「さがひな市」に出店したところ、来場者から好評をいただきました。

加藤餃子研究所の協力を受け、「さがひな市」では「ひしぎょうざ」を販売した

次に形になったのは、和菱のグラノーラです。人気の絵本「ぐりとぐら」にヒントを得て、「ひしとぐら」と名付けました。こちらは神埼市内の米粉スイーツ専門店「コメコロールズ」とコラボし、５月にＳＡＧＡアリーナで行われた「ＳＡＧＡものスゴフェスタ」にブースを出しました。この時は「和菱に触れ、和菱のことを知ってほしい」と商品を販売するとともにワークショップも実施し、子どもたちに菱を練り込んだクッキーにチョコレートで絵を描いて楽しんでもらいました。

ＳＡＧＡものスゴフェスタでは、ブースを設けて和菱の魅力をアピールした

神埼市がクラウドファンディングで支援

当然のことながら、どんどん動くとなると、必要になるのは活動資金です。3人を中心にした頑張りを支援したいと、神埼市が実施主体となり、クラウドファンディングを実施することになりました。大学生の熱意や行動力に共感した全国の人から目標を大きく上回る寄付が寄せられました。5月にその贈呈式があり、實松尊徳市長から研究開発資金230万円の目録が樺嶋さんら西九州大学の代表に手渡されました。

栽培と商品開発を両輪に

若い3人が熱心に動き、周りに支援の輪が広がってきています。「僕たちの手で和菱を増やしたい。若い人たちに知ってもらうため、食べやすい商品を作りたい」と3人は力を込めます。水田での栽培についても、新たに土地を借り、栽培のノウハウを教わりながら、田植えから管理、収穫まで自ら手掛ける考えです。和菱でひしめく神埼市にしたいと張り切っています。

大学生のチャレンジ、私たちも応援しています

和菱復活に向け、熱心に活動している3人には、応援団もいっぱいです。関係者が一丸となり、一緒に盛り上げていこうという機運が高まっています。

神埼市商工観光課　佐藤健一さん、山本未央さん

大学生らしい目線、感性でチャレンジを

もともと神埼市と西九州大学は、以前から深いつながりがあります。地域の特産品である和菱の成分分析や商品開発について、市から大学にお願いしてきた経緯があり、実績も重ねてくださっています。今回、大学生たちが和菱減少の課題解決に手を上げてくれたことに感謝しており、市としても、ぜひとも応援したいということで、クラウドファンディングの実施主体になりました。全国の皆さんから寄せられた寄付を和菱の復興に有効に使っていただければと思っています。

市民のみなさんが昔から食べていた和菱の生育環境については厳しいものがあります。以前はクリークに自生していたのですが、異常気象やカメの食害などの影響で、まったく取れなくなっています。水田での栽培についても、農家さんの減少もあって作付面積が大きく減っています。

和菱の復活に向け、課題解決はなかなか難しいと思いますが、地元の大学で学んだことを生かし、頑張っていただきたいというのが率直な思いです。大学生の皆さんは、市内の米粉スイーツ専門店「コメコロールズ」さんなどと商品開発にも取り組んでくれており、それにも注目しています。大学生らしい目線、感性、発想力で新たなものをどんどん作ってくれたらと思っています。

「ぎょうざ屋」
「加藤餃子研究所」
代表
加藤　均さん

情熱を燃やして取り組んで

「ぎょうざ屋」は、佐賀市呉服元町の中央マーケットの中にある1952（昭和27）年創業の手作りぎょうざの専門店です。当店の味は旧満州で生まれ、佐賀で育ちました。厳選した素材と旬の野菜をふんだんに使い、皮から一枚一枚麺棒で伸ばして作ることなど、基本は先代から変わりませんが、現代風にアレンジするなど常に試行錯誤しています。

そうした思いもあり、私自身は「加藤餃子研究所」を立ち上げ、新たなチャレンジをしています。これまでに葉大根のぎょうざ、黒炭を使った黒皮のぎょうざなどを作りましたが、こうしたことに取り組む中で、大学生の皆さんからオファーがあり、一緒に新商品を開発することになりました。ひしの皮には、健康にいいポリフェノールが含まれており、食べて元気になるぎょうざを目指しました。佐嘉神社で3月に開かれた「さがひな市」に大学生の皆さんと出店し、「ひしぎょうざ」と竹炭を加えた「黒皮のひしぎょうざ」を販売しましたが、多くのお客様に好評をいただきました。

もちろん大学生の取り組みを純粋に応援していますが、商品開発では、自分たちの考えているほど簡単に行かないこともあるでしょう。そうした時、困難を乗り越えるためには、もっともっとひしのことを好きになってほしいと思います。「この商品でやっていくんだ」と決意し、情熱を燃やして取り組めば、きっと花を咲かせることができると思います。頑張ってください。

運動部活動と外部指導者をマッチング

「WIDE」を立ち上げた4人。（右から）北原誠大さん、山口修平さん、永石恒陽さん、三枝功伸さん

WIDE（鹿島市）

佐賀大学は、佐賀大学発のベンチャー企業として現在6社を認定しています。福祉、情報サービスなどの分野で起業した卒業生が活躍していますが、その中から、運動部活動と外部指導者をマッチングするウェブサービスを展開している創業3年目の「WIDE」（鹿島市、北原誠大代表取締役）を紹介します。

鹿島高校卒の同級生4人が意気投合

2022年4月、大学4年生のときにWIDEを立ち上げたのは、北原誠大さん（佐賀大卒）、山口修平さん（北九州大卒）、永石恒陽さん（広島大卒）、三枝功伸さん（名桜大卒）の4人です。4人とも鹿島高校卒の同級生ですが、在学中、新型コロナの感染対策で大学の授業すべてがオンライン授業になった時期がありました。地元に戻った4人で就職について語り合う中、「起業して一緒に働くことができたら」と会社設立の話が持ち上がりました。

自身の体験から運動部活動に注目

「自分たちは何ができるのか?」。起業に向け、北原さんら4人が注目したのは、運動部活動です。自分たちの学生時代を振り返った時、部活動に熱中したことで、人として大きく成長できたという実感がありました。ただ、競技の経験者でない先生に指導を受けた時期もあり、先生たちにしてみれば、授業と運動部活動の指導で多忙を極めているという現実もあります。4人は、それぞれの大学に戻った後もビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」を一日中つなぎながら論議。こうしたミスマッチを解消することができれば、生徒と教師の双方にメリットがあると考えました。

サービス名は「すくスポ」

WIDEが2023年に提供を開始した運動部活動と外部指導者をマッチングするウェブサービスの名前は「すくスポ」です。地域で暮らす外部指導者が登録申請すると、審査後、名前のイニシャルや指導者を探すのに必要な情報がページ上に掲載されるようになります。許可してくださる方については、顔写真も掲載されるので、安心感もあります。「すくスポ」には現在43人が登録。一方、外部指導者を探しているチームもアカウントを作ることができます。これまで鹿島市や佐賀市の中学校などがサービスを利用。仲介役のWIDEにとっては、マッチング成立の紹介料などが収入となります。

ことし2月、大きな前進がありました。九州電力と、中学生にスポーツや文化活動の体験機会を提供する、指導者とのマッチングサイトの共同開発などで業務連携契約を締結しています。

WIDE代表取締役 北原 誠大さんインタビュー

どんな思いで会社を立ち上げ、どのように業務を軌道に乗せてきたのか。起業から3年目、WIDE代表取締役の北原誠大さん(24)に、これまでの歩みについて聞きました。

「部活動に関しては誰よりも考えていたという自信があります」と起業のきっかけを語るWIDE代表取締役の北原誠大さん

大学4年のときに会社を設立されていますが、きっかけを教えてください。

――私たち会社の設立メンバー4人は、鹿島高校卒業の同級生です。私自身は、佐賀大学教育学部に進学しましたが、2年生のとき、新型コロナの影響で対面授業がほぼなくなり、オンライン授業に切り替わった時期がありました。これは他の設立メンバーも同じで、広島、福岡、沖縄から地元鹿島に戻ってきて、一緒の場所でそれぞれオンライン授業を受けている時期もありました。1年近く一緒にいて、「就活をどうしようか」と話す中、何をするか決まっていたわけじゃありませんが、「仕事一緒にできたらいいね」と話が持ち上がりました。自分自身は教員志望でしたが、自分が受け持つクラスや学校だけでなく、もっと広い範囲で教育を変えていくことができたらという思いもありました。

多くの人の支援が力に

部活動に着眼したのはなぜですか。部活動の地域移行を先取りした格好です。

――自分は小学校からずっとサッカーをやっていましたが、部活動を続ける中で、人として成長できたという実感があります。部活動を引退し、受験勉強をするようになってからも、部活動にずっと関わり続けたいという基本的な思いがありました。

起業するのは大変だったと思います。何が助けになったのでしょうか。

――特定の人を挙げることはできませんが、本当に周りの方の支援が大きかったと思っています。いろんな人とつながるきっかけをくださったのは、佐賀県産業DX・スタートアップ推進グループです。起業家が集まるイベントに参加させてもらったのですが、いろんな人がいて、そこから県内外のいろんな方につなげてもらいました。ビジネスコンテストで賞をいただきましたが、書類を作る段階だったり、プレゼンテーションの準備をする段階だったり、支援やアドバイスを受けました。起業した後、佐賀大学発ベンチャー企業に認定いただいたことも後押しになっています。

会社設立から3年目に入りました。振り返ってみてどうですか。

――ラッキーなことも多かったと思います。自分が知らなかっただけかもしれませんが、もともと部活動のことをやろうと思ったときは、地域移行の話はそんなに大きく出てはいませんでした。後で聞いて、そういう流れなんだと思いました。今回、九州電力様とマッチングサイトの共同開発などで業務連携契約を結ばせていただきましたが、ネームバリュー、信頼のある九州電力様と組めることで、私たちの認知も進みましたし、自分自身、仕事の進め方などいろんな面で勉強させていただいています。ビジネスコンテストで賞をいただいたのも、時代の流れ、国の方針がたまたま重なったというところがあります。また、メディアの方にも大きく取り上げていただきました。それだけに、この機会をちゃんと生かしきれないといけないと思っています。

ラッキーなこと多かった

起業したいと夢を描いている人にメッセージをお願いします。

――自分は本当に起業できるとは思っていませんでしたが、部活動に関しては、誰よりも考えていたという自信はあります。起業全般を知っていたわけではありませんが、社会を変えたいという強い思いがあれば、共感してくれる人は、いっぱいいらっしゃると思います。佐賀の人はみなさん温かく、応援してくださったり、プライスレスでアドバイスしてくださいます。何かやりたいと思ったら、行動したほうがその後の後悔もありません。がむしゃらにやれば何とかなる、そんな気がします。

「すくスポ」のイメージ。外部指導者、外部指導者を探しているチームの双方が登録できる

https://www.wideofficial.com/

［記事：杉原孝幸　　デザイン：蒲原貴子］